

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：32646

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02121

研究課題名(和文)三味線譜を主軸とする義太夫節の音楽学的基礎研究

研究課題名(英文)A historical study of Gidayu-bushi; by researching on musical score of shamisen

研究代表者

太田 暁子(OTA, AKIKO)

東京音楽大学・音楽学部・講師

研究者番号：90399741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は17世紀後半から現在に至るまで語り継がれ、「音曲の司」と称されてきた浄瑠璃の一派「義太夫節」の実態を、三味線譜の解釈を主たる手段として具現化し、音楽面における歴史的変遷を明らかにすることを目的とした。三味線音楽の中でも特に語りの要素の強い義太夫節の旋律の実態を知るには、浄瑠璃譜に三味線譜が併記されていることが大きな助けとなる。本研究では義太夫三味線の旋律が歴史的にどのように変遷したのかを辿り、現在演奏されている義太夫節の旋律と比較しながら音楽の変遷を辿ることを試みた。復元した旋律は五線譜化し、義太夫三味線古譜の解釈を広く公表するとともに五線譜での現行旋律との比較も行った。

研究成果の概要(英文)：Gidayu-bushi is a genre of joruri, accompaniment musical narrative of the Japanese puppet theater, Bunraku. It is founded by Takemoto Gidayu in 17C and has been inherited as a kind of the shamisen music to date. The approach of the studies from the field of literature and drama to Gidayu-bushi is advances now, but the historic approach from a music side does not yet. This study decodes the shamisen score of Gidayu-bushi of the oldest late 1700s and clarifies the historic change as the musical melody. I translated the melody of shamisen restored to the original state to current musical score. As a result, it was revealed that some patterns of the historic change in the music side existed. This study will become the study to capture the historic change of the joruri music three-dimensionally.

研究分野：義太夫節

キーワード：義太夫節 音楽学 日本音楽史 三味線音楽 浄瑠璃

### 1. 研究開始当初の背景

竹本義太夫(1651-1714)が語っていた時代の浄瑠璃から、現在語られている義太夫節の形に定着するまで、音楽的にどのような変遷があったのだろうか。義太夫節の研究におけるこうした視点からの音楽学的アプローチは簡単に想起されるテーマであるにもかかわらず、それに対してほとんど系統立てた試みはなされてこなかった。それは楽譜史料の整理、解読、解釈が困難であること大きく起因しており、遺された史料を生かし切れていないという事実が背景にあった。

浄瑠璃の中でも語り物の三味線音楽である義太夫節を楽譜から音楽的に再現するには、三味線譜が併記されていることが大きな手がかりとなる。過去に義太夫節の三味線譜の翻刻が試みられたことはあったが、それは口三味線や勘所譜を忠実にそのまま「文字として」翻刻することに留まっており、音楽として具体的に旋律を蘇らせるまでには至っていなかった。

### 2. 研究の目的

竹本義太夫の時代の義太夫節は、現在と比べると三味線との絡みが少なく、三味線の手数(演奏される音の数)が少なかったとされる。義太夫節の三味線譜の歴史を辿ると、1700年代半ばまでしか遡ることができないが、三味線譜が出てきた理由に「三味線の旋律の複雑化」による記譜の必要性が生じたことが挙げられている。それが事実であるとするならば、三味線の手数が多くなればなるほど、演奏において音程や運び(演奏するテンポ)など、演奏に必要な要素を三味線弾きが司る割合が大きくなることから、義太夫節の演奏における実質上の三味線弾きの地位の向上があったと言えるのではないかという仮説が成立する。本研究はこうした変遷を明らかにするための一端となるものである。

(1) 本研究は、三味線音楽の中でも特に語りの要素の強い浄瑠璃の一派「義太夫節」の音楽面における歴史の変遷を、三味線譜の旋律を具現化しながら歴史的に辿り、明らかにする。

(2) 本研究にて行った三味線古譜の音楽的復元を五線譜化することによって、当時の旋律の概略を視覚的に蘇らせ、現行の義太夫節の旋律との比較を行い、広く公開する。

### 3. 研究の方法

(1) 義太夫節の楽譜の中でも、本研究は主に三味線譜の解読を手がかりとして、義太夫節の音楽面に於ける歴史の変遷を明らかにすることを試みた。語り物音楽である浄瑠璃の具体的な旋律を辿るには、三味線譜の解読が非常に有効である。特に本研究では江戸時代の三味線譜に主眼を置き、現状と比較した。

義太夫節の三味線譜には大きく3つのタイ

プある。

1. 浄瑠璃作品の外題、段、場面ごとなどにまとめて書かれた楽譜。即ち三味線譜が併記された浄瑠璃本など。
2. 節ごとの譜に節名と朱が入れられたもの。いわゆる節づくしの類。
3. 三味線独習書。

本研究では3.の体裁を保ちつつ、その内容に2.を含んでいる史料、『浄瑠璃三味線ひとり稽古』(以下『ひとり稽古』とする)を重視した。これは義太夫三味線の奏法に関して記された最古の書として知られる18世紀半ばの史料で、ここに記された義太夫節の三味線の旋律を明らかにし、現行浄瑠璃における三味線の旋律との比較を行うことにより、義太夫節の歴史の変遷を音楽面から辿る大きな目安とすることにした。

また、1.と2.の史料の解読も行い、現行音楽との比較も行った。

(2) 多分野における義太夫節の研究者や義太夫節の実演家と連携する研究活動を行った。また義太夫節の実演家を招いて芸に関する詳細な聞き取り調査やディスカッションを行った。

### 4. 研究成果

(1) 『ひとり稽古』は、前編が宝暦7年(1757)、後編が宝暦10年(1760)に刊行された二冊からなる義太夫三味線の独習書で、奏法に関して記された最古の書として知られる。三味線独習書の体裁をとり、先ず義太夫三味線の概要や基本的な奏法が初歩から解説され、続いて楽譜部分、即ち短い旋律や定番の旋律型の唱歌(口三味線)に勘所(左手で棹を押さえるポジション)が併記された譜と、弾き方の解説が記されている。この楽譜部分の書式は節づくしの書式である。

『ひとり稽古』は鶴沢新石・野沢喜立伝、末よし梅笑編、雁鷺山人序とあるが、いずれの人物の正体も未だに明らかにされていない。しかし史料の内容を検討した結果、「竹豊両座の床にあがるような著名な人物ではない」としてその内容の信憑性もあまり高くないとする見解が存在することに関しては、認識を改める必要があると思われる。

浄瑠璃の具体的な旋律を辿るには三味線譜の解読が有効だが、江戸時代における義太夫節の三味線譜の記譜法は多様である。譜は基本的に心覚えのための手稿譜であり、速記性が重視されるために筆跡のみならず省略記号、奏法記号などの個人差もあり、通常は解読と解釈に困難を伴う。

その点、『ひとり稽古』は刊本であり、字そのものの解読は通常の譜に比べて容易であった。しかし用いられた記譜法は独特のも

のであったため、記譜された旋律を音楽的に復元するには段階的な作業が必要であった。

基本的な三味線奏法に関する知識を得た上で本文を読解し、史料で用いられた記譜法を整理し、調弦と勘所と運指を対照させ、併記された口三味線と奏法説明を読解し、音価を検討した。このようにして『ひとり稽古』の楽譜部分全体を復元し、さらに五線譜化することによって、18世紀半ばの義太夫三味線の旋律を視覚的にも蘇らせた。

『ひとり稽古』に記された旋律型と、現行の義太夫節の旋律型とを比較すると、大きく以下の性質に分かれることが明らかになった。

1. 現行の旋律型と全く一致するもの
2. 現行の旋律型とほぼ一致するが、ごく部分的に異なるもの
3. 現行の旋律型と一致する部分も見られるが、断片的であったり、異なる旋律が入ったりしているもの
4. 全く一致しないもの

ただしこれらの分類は「三味線譜」を根拠とする現行旋律との比較であり、三味線の旋律のみの比較に他ならない。当時の三味線の旋律型が現行の旋律型と一致している場合には、それに伴う語りの旋律も本質的には大きく変わらなかったであろうと推測されるが、問題は「異なる場合」である。その場合、語りも三味線も旋律が変わったのか、あるいは語りが変わらないのに三味線の旋律のみが変わったのか、を検討する必要がある。

『ひとり稽古』には、掲載された三味線の旋律が現行の三味線の旋律とは全く異なるものの、現行浄瑠璃の語りに合わせて演奏してみると、合わせられる可能性を孕んでいる旋律があることが分かった。この点に関しては、語りとの関係性を視野に入れた上で更なる検討が必要とされるため、新たな課題を生むこととなった。

また、浄瑠璃の語りがなく、三味線で間奏的に演奏する旋律型「フシヨクリ」の比較結果も興味深いものであった。『ひとり稽古』掲載の「フシヨクリ」を復元したところ、現行の「フシヨクリ」と比べて繰り返しがなく、最後の部分も非常にシンプルで短い旋律であることが分かった。このことから、現行旋律は既存の旋律を原型として部分的な繰り返しを行ったり、新たなフレーズを加えたりすることによって、より長く、より華やかな旋律へと変化させ、器楽的な発展を遂げながら現行の「フシヨクリ」の旋律型に至ったということが明らかになった。

また「ツナギ」は一音のみ現行と異なり、音の数の少ない「色ドメ」は現行旋律と完全に一致した。

そのほか、現行のフレーズとは似ても似つかない旋律に復元されたものもあった。これ

らの旋律がいつの時点で失われたのか、あるいはいつ取って代わられたのかに關しての検討も今後の課題とされる。

(2) 三味線譜が併記された浄瑠璃本や、三味線譜の調査をできる限り多く行うことによって、記譜の変遷、記譜のパターン、系統の整理を行った。解読の結果から、三味線譜が出現して以降の音楽的な変遷を辿ることが可能なことが分かった。

(3) 義太夫節の記譜法ではない記譜による公刊譜や、五線譜化された義太夫節の譜についての調査、整理を行った。またこれらの資料における凡例や内容を、本研究の三味線古譜を五線譜化する際に参照した。

(4) 多方面の分野における義太夫節の研究者や義太夫節の実演家と連携して研究活動を行った。義太夫節の演劇面や音楽面など多様な角度からアプローチしている研究家をメンバーとする「義太夫節演奏研究会」を結成し、各自の研究報告を行い、関連する討論や情報交換を行った。また義太夫節の実演家を招き、修行に関する手法や逸話等、芸に関する詳細な聞き取り調査や、それに関するディスカッションを行った。

また「義太夫節演奏研究会」の研究報告会(公開制)を二回開催した。そこでは研究成果報告として複数の研究者による講演を行ったほか、座談会で実演家の稽古の様子を伺い、一般公開した。

第一回 2016年11月27日(於・東京藝術大学)

第二回 2017年5月27日(於・京都市立芸術大学)

(5) 三味線譜の旋律型に関する録音資料の五線譜化を行い、旋律型の整理、データ化を行った。五線譜化にあたっては記譜の凡例の検討も行い、本研究における古譜の五線譜化の際に参照した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

太田暁子、義太夫三味線独習書『浄瑠璃三味線ひとり稽古』の五線譜化、東京音楽大学研究紀要、査読無、第40集、2017、121-134

太田暁子、義太夫三味線独習書『浄瑠璃三味線ひとり稽古』の五線譜化(二)、東京音楽大学研究紀要、査読無、第41集、2018、75-87

[学会発表](計1件)

太田暁子、義太夫三味線独習書『浄瑠璃三味

線ひとり稽古』の音楽的復元、東洋音楽学会  
大会、2017

6 . 研究組織

(1)研究代表者

太田暁子 (OTA, Akiko)

東京音楽大学・音楽楽部・講師

研究者番号：9 0 3 9 9 7 4 1